とかちローカルサミット　G8セッション

テーマ：「持続可能な地域とまちづくり」

(M) 手塚　伸

山梨県商工労働部商工総務課総括課長補佐
山梨学院大学ローカルガバナンス研究センター
客員研究員
国民森林会議常任幹事　多摩源流研究所幹事

＜略歴＞

- 山梨県生まれの48歳。
- 1982年山梨県庁入庁。農政、福祉、教育などの現場を経た後、90年から1年間の銀行派遣を含め、県の地域政策形成部門を中心に勤務。01年から(財)山梨総合研究所主任研究員を経て、03年、山梨県政策秘書室。07年4月から現職
- 「政策形成・評価と新しい課題への対応」((社)日本経営協会　共著)

(K) 藻谷　浩介

日本政策投資銀行 地域振興部 参事役
NPO法人 ComPus地域経営支援ネットワーク 理事長

＜略歴＞

- 山口県生まれの44歳。平成合併前の3,200市町村の99.9%、海外53ヶ国を私費で訪問し、地域特性や郷土史を詳細に把握。地域活性化や人口成熟問題、観光振興などに関し、全国で年間400回以上の登壇をこなしている。政府関係の委員、諸大学の臨時講師多数。内閣府地域再生本部「地域活性化伝道師」。中小企業庁「中小企業サポーター」。
- 日本経済新聞出版社より、「実測！ ニッポンの地域力」を刊行（現在5刷）。

岸本　吉夫

経済産業省中小企業庁
経営支援課長

＜略歴＞

- 昭和37年神戸市生まれ。
- 昭和60年に通商産業省に入省。
- 平成11年中小企業庁にて中小企業基本法の改正に携わる。
- 平成15年経済産業省環境経済室長として地球温暖化問題を担当。警察庁組織犯罪対策部への出向を経て、平成19年8月から現職。

谷　昌幸

帯広畜産大学地域環境学研究部門　准教授

＜略歴＞

- 昭和43年1月25日生　40才　大阪府出身
- 平成15年10月　帯広畜産大学畜産学部助教授昇任現職
- 国立大学法人帯広畜産大学　地域環境学研究部門　准教授
- 専門分野　土壌化学、農畜産環境保全学
- 最近では、土壌や肥料に係る教育や研究だけではなく、農業生産現場と市民を結ぶ情報交換や情報共有の場を提供する「十勝農業イノベーションフォーラム」を設立し、生産現場で農と土を語る「アースカフェ」を開催するなどの活動も行っています。

傘木　宏夫

NPO地域づくり工房　代表理事

＜略歴＞

- 東京都出身大阪教育大学在学中の国際連帯活動がきっかけで、南米チリに渡る。
- 帰国後、四大大気汚染訴訟の一つ「西淀川公害訴訟」の支援活動に参画。若い金の一部を原資に設立された公害地域再生センター（あおぞら財団）の研究主任に就任。
- 2002年に「NPO地域づくり工房」設立。
- ミニ水力発電や、菜種オイル生産・バイオ軽油製造のプロジェクトを実施するなど、市民の手で地域資源を掘り起こし、仕事を興すプロジェクトに取り組んでいる。

木野村　英明

木野村英明法律事務所　代表
弁護士

＜略歴＞

- 帯広商工会議所青年部　研修連携委員会
- 立教大学卒。地域、若手弁護士の一人。ファイナンシャルプランナー資格（CFP）も保有し、経済にもあかるい。

三宅 曜子

㈱クリエイティブ・ワイズ　㈱マーケティング・ナビ　代表取締役社長
マーケティングコンサルタント、ライフコーディネーター

＜略歴＞

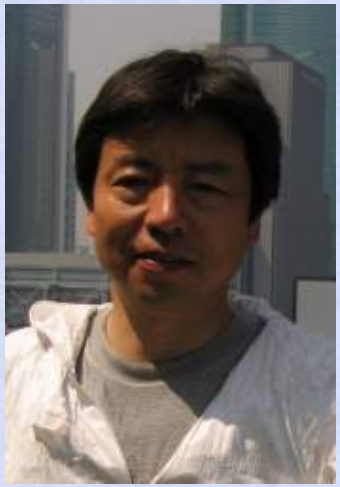
- 大学卒業後、衣・食・住全般のライフコーディネーター、及びスタイリストとして企業の販売促進プロデュース、広告制作、イベント関連プロデュース等を行う。その後、マーケティングコンサルタントとして、中小企業支援及び指導、商業活性化事業、まちづくり事業等、顧客のニーズを的確に捉えた市場開発とアプローチ手法等、幅広い分野におけるマーケティング全般のアドバイスを全国各地で手がける。
- 　又、19年度、経済産業省中小企業地域資源活用事業プログラムの政策審議会委員、国会での中小企業法案（中小企業地域資源活用促進法案）審議の参考人として立つなど、地資源活用事業促進のハンズオン支援を積極的に行う。

高安　和夫

NPO法人銀座ミツバチプロジェクト　理事長
農業生産法人有限会社アグリクリエイト
取締役東京支社長

＜略歴＞

- 1965（昭和40）年、千葉県生まれ。
- ナショナル住宅千葉パナホーム株式会社を経て、99年、農業生産法人 ㈲アグリクリエイトへ入社。
- 03年8月、取締役東京支社長就任。現在に至る。
- 04年10月、「銀座食学塾」を設立、代表世話人に就任。
- 08年7月第19回シンポジウム「米消費の新潮流」開催。　05年4月、「銀座食学塾米作り隊」結成。
- 06年3月、「銀座ミツバチプロジェクト」を田中淳夫氏と共同で立ち上げる。
- 07年2月NPO法人銀座ミツバチプロジェクト理事長に就任。
- 08年5月、ファーム・エイド銀座2008開催、実行委員長として今後7月から1月は農業分野のクリエーターとして、環境を意識し食と農を大切にするライフスタイルの創造に挑戦中。



田中　淳夫

NPO法人　銀座ミツバチプロジェクト　副理事長
銀座の街研究会 代表世話人
(株)紙パルプ会館 常務取締役

＜略歴＞

- 1957年東京生まれ。
- 2006年春から、銀座の周辺で働く有志たちが集まり、ビルの屋上45Mの場所でミツバチを飼うプロジェクトがスタート。ミツバチの飼育を通して、都市と自然環境との共生を目指すプロジェクト。採れた蜂蜜は、銀座の技としてバーやスイーツ店、デパートなどで次々に商品となり季節の話題となっている。

セッションの様子

モデレーターからの航路提示

- 「まちづくり」とは何か
- 多分、発端は、「名古屋栄東戦後復興土地区画生地事業」における三輪田さんの発言
- 「街づくり」から「町づくり」、その間「地域づくり」「まちおこし」「むらづくり」などの派生用語
- まち、地域と何か→イメージできる広がりで！
- 収拾がつかない状況
- 一体、まちづくりは何処へいくのか

キーマン登場：藻谷氏。キー1＝縮小文明

- 日本人が人口的に増え続けてきた時代の「まちづくり」が依然跋扈
- 地方では平均的に15年前に人口は減ったと実感
- 東京でも7年前から実感しているはず。
- 平均的に、15年前から日本は縮小へ
- 今、求められるのは、縮小時代に対応したまちづくりの考え方

キー2：市場経済に任せていいのか？

- 縮小文明と言われる時代に、私たちは、市場経済に身を委ねる、という選択肢を採用した。（させられた。）
- 選択と集中
- 経済、政治の単線化
- しかし、市場のいうとおりにやってきたことが間違いだったのでは？
- 誰が主人公なのか？

現状認識・アクションプログラム→その１

- 地域の潜在的な力が十分に表に出ていない。
- サイレントマジョリティの声が響かない。
- 潜在的な力、物言わぬ少数派の活動を当たり前のように生活の舞台に出していく作業が行われていない。
- 日本の都市（まち）は地方（むら）に支えられて成立してきた。この関係性を見直し再構築する。
- むらの側もすべての質を高めていかなければならない。つくり出すものを、共同体の中で熟成していく試みが重要
- そのためにも、添え稼ぎ、遊び仕事、マイナーサブシスタンスの価値の再評価をすべき

その２：地域からまち、まちから場所へ

- 現在、我々を覆っている課題は極めて明快。
- ハイパー高齢化への対応、食糧問題への対応、環境問題、とえりわけ低酸素社会にどのように対応するか。
- 行うべきことも明快
- 場所を提供する（地域の良いものを包み込めるよう、少なくとも3年を見通して体験を重ねられるよう。）

その３：潜在的な地域資源をあからさまに

- まちづくりのために必要な「地域の経営資源」が見通せていない。
- 仮にそれを見通せたとしても、表現する方法がわかっていない。
- 良いものがあっても、見通せなければ「生き甲斐」が得られない。
- キーワードは「生活の提案」
- 普通の人々、女性（お母さん）が普通の言葉で自己表現できる場をつくろう
- そして、その「ほとばしり」を形（販路）にしていこう。
- 地域資源の顕在化こそが「まちづくり」成功のコンピタンス

その4：地域のDNAを継承する。

- それぞれの地域が、地域の歴史をDNAに刻み込まれたものとして継承していない。
- 1607年、朝鮮特使を迎えた際の家康の対応。そこから発生する銀座の価値。
- 単に、歴史の再評価ではなく、歴史を生活者の体内に刻み込み、そこから発想していこう。
- 全体の質を向上させることは最終ゴールであっても、とりあえず、出来る人が輝こう。

その5：まちづくりにおける合意形成

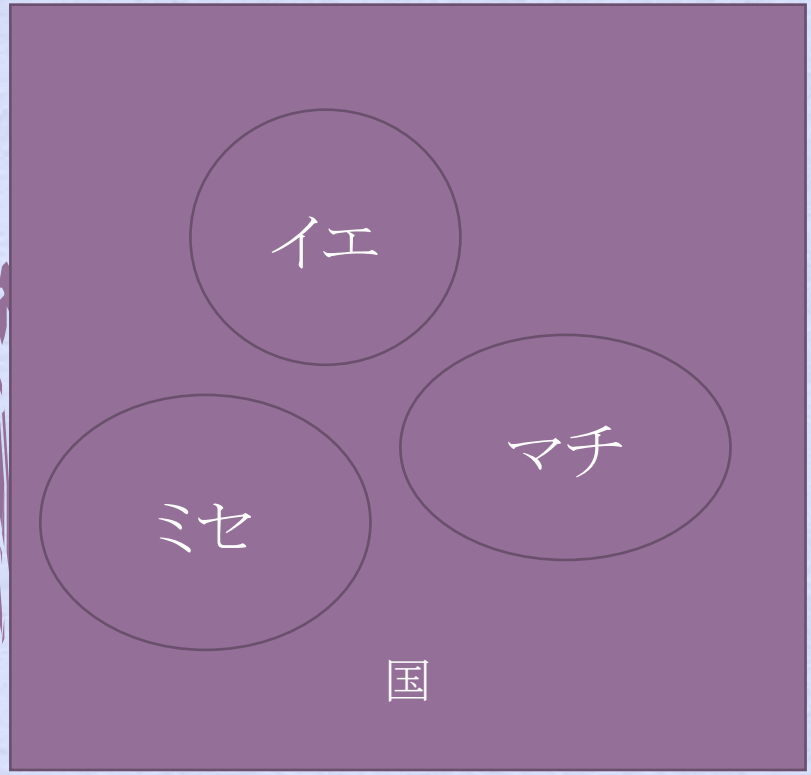
- 地域の形態に応じて、合意形成の手法は様々にあるはず。あいまいな合意で（例えば多数決）決めてしまうことはあまりに危険。
- 直面する課題に応じて様々な合意形成手法を受け入れよう。
- 特に、法律家やコーディネーターを入れたリーガルマインドな合意形成手法の萌芽が見られており、こうしたやり方を上手に採用しよう。

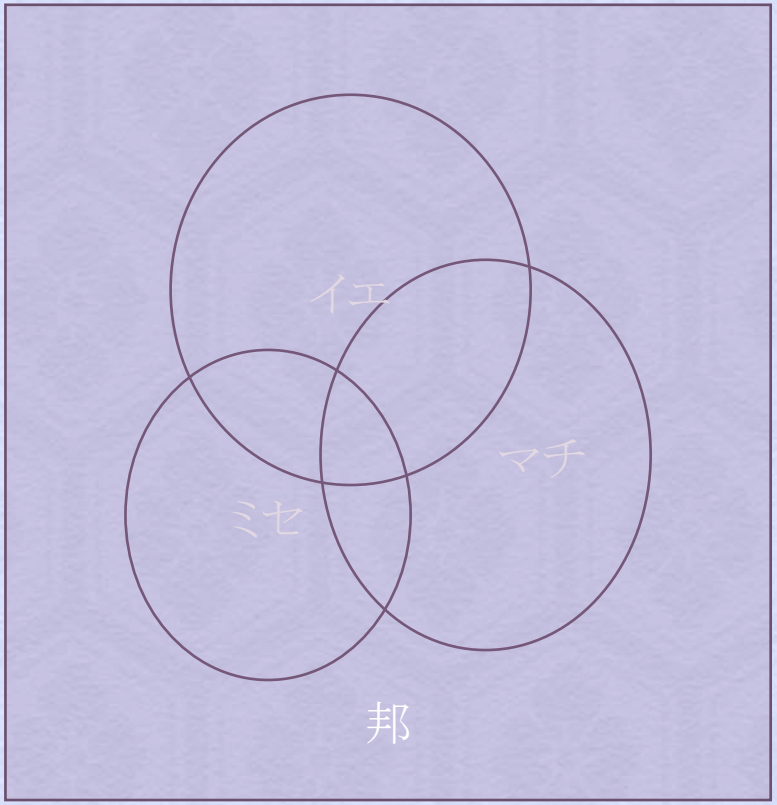
その6：十勝へ

- 「豊かな食材」「豊穣な大地」「訪れる人へのホスピタリティ」は本物か。
- 十勝の人々が、現実に対峙する必要がある。
- マスコミを巻き込み、真剣に現状を変えていく作業をする努力が必要。
- これは十勝だけのもんだいではない。
- 最低3年、こつこつと正しい事実を積み上げよう。最初は口コミでも、それを志民運動論に。

モデレーターの独断発言

- 「まちづくり」から「まち育て」へ
- 死民→市民→志民
- いえ・みせ・まち・くに


イエ
マチ
ミセ
国


イエ
マチ
ミセ
邦